

報道関係各位

2008年8月13日
緑内障フレンド・ネットワーク

緑内障フレンド・ネットワーク 患者会員調査
緑内障が発見されたのは40-50歳代で59.8%
診断時に視野が半分以上欠けていても「自覚症状はなかった」27.9%
自覚症状が現れにくいのは“初期の段階に限らない”ことが明らかに

緑内障の啓発を主に活動する患者組織である緑内障フレンド・ネットワーク(代表:柿澤映子、会員:1,641名)は、緑内障患者の実態を把握するため、2008年5月2日~6月6日、患者である会員を対象にアンケート調査を実施しました。

その結果、緑内障と診断された時点で視野が半分以上欠けていたにもかかわらず「自覚症状はなかった」と答えた患者が27.9%(61/219人)にのぼり、自覚症状が現れにくいのは“初期の段階に限らない”という緑内障の特徴が浮き彫りになりました。また、緑内障が発見された年齢は40-50歳代に集中し、全体の59.8%(575/962人)を占めています。発見されたきっかけは「他の目の疾患で眼科を受診した」場合が最も多く、「健康診断で発見された」人は10.0%(97/967人)にすぎませんでした。

緑内障は約8割から9割の患者が未受診、つまり、まだ自分が緑内障であることに気がついていないと言われています。今回の調査からも明らかのように、しばらく眼科検診を受けていない働き盛りの方には特に注意が必要です。「緑内障ではない人でも、眼の定期健診は必要」99.7%(958/961人)というのは、早期発見の重要性を身にしみている患者からのメッセージです。

緑内障フレンド・ネットワーク事務局長 野田 泰秀

【調査結果の要約】

■ 緑内障と診断された年齢は、40-50代で59.8%

緑内障が発見された年齢は50代が最も多く35.9%(345/962人)、次いで40代が23.9%(230/962人)、60代が20.5%(197/962人)となり、40-50代で全体の59.8%(575/962人)を占めました。

■ 緑内障との診断時、視野に欠損があると診断された患者は73.2%

緑内障と診断された時点で視野に欠損があると診断された人は、視野が「少し欠けていた」50.3%(482/958人)、「半分程度欠けていた」12.4%(119/958人)、「かなり欠けていた」10.4%(100/958人)で、合計73.2%(701/958人)に上りました。

■ 緑内障との診断時、視野が半分以上欠けていても「自覚症状はなかった」が27.9%も

緑内障と診断された時点で、視野が半分程度欠けていたのに「自覚症状はなかった」が26.9%(32/119人)、視野がかなり欠けていたのに「自覚症状はなかった」が29.0%(29/100人)で、合計27.9%(61/219人)に上りました。このことから、自覚症状が現れにくいのは初期の段階に限らないことがわかりました。

■ **健康診断で緑内障が発見された患者はわずか 10.0%**

緑内障が発見されたきっかけは、「他の目の疾患で眼科を受診した」が 23.4% (226/967 人) で最多でした。一方、健康診断で緑内障が発見された人は、10.0% (97/967 人) にすぎませんでした。現行の健康診断では、緑内障の発見につながる検査項目が必須では含まれていない場合が多いためだと思われます。

■ **緑内障のタイプでは、半数がNTG(正常眼圧緑内障)**

緑内障のタイプの中ではNTGが最も多く、全体の 49.0% (475/969 人) を占めました。NTGは特に日本人に多いと言われ、眼圧が正常の範囲内にもかかわらず視野が欠けていくタイプのため、眼圧検査だけでは発見できない緑内障です。

■ **緑内障との診断時、9 割の患者が失明への不安を抱いた**

緑内障と診断された時に不安に思ったこととして、「失明への不安」を挙げた患者が 90.2% (864/958 人) に上りました。次いで、「仕事や家事ができるかどうかの不安」が 40.7% (390/958 人) を占めました。

■ **緑内障との診断後の生活の中で、「病気にに関する情報」と「専門医の情報」が必要**

緑内障と診断された後の生活において必要なものとして、「症状や治療法といった、緑内障に関する詳しい情報」が最も多く 89.6% (863/963 人)、次いで「緑内障専門医に関する情報」77.7% (748/963 人) となりました。また、「精神的なサポート」という回答も 37.9% (365/963 人) 寄せられました。

■ **7 割～8 割以上の患者が自治体、企業の健康診断での緑内障検診を希望**

緑内障の早期発見のために必要な取り組みとして「地方自治体の定期健診に緑内障の診断項目を入れる」と回答した人は 89.5% (864/965 人)、「企業の定期健診に緑内障の診断項目を入れる」と回答した人は 72.5% (700/965 人) に上り、ほとんどの患者が年に一度行われる健康診断の検査項目に緑内障の発見につながる検査を導入する必要性を訴えています。

■ **99.7%の患者が、「緑内障でなくても、目の定期健診は必要」と回答**

回答者のほぼ全員、99.7% (958/961 人) が「緑内障ではない人でも、目の定期健診は必要」と回答しています。

■ **8 割の患者が、緑内障は「治療の継続」や「早期発見・早期治療」が大切と回答**

緑内障に対して抱くイメージは、「治療の継続と正しい管理が大切」が 79.6% (771/969 人) で最も多くを占めました。僅差で「一生、気長に付き合っていく慢性疾患」、「早期発見・早期治療が大切」などが並び、緑内障と向き合っている患者の姿が伺える結果となりました。

* 調査の概要につきましては別紙をご参照ください。

本リリースに関する報道機関からのお問い合わせ
緑内障フレンド・ネットワーク事務局
〒103-0027 東京都中央区日本橋 1-2-16-501
TEL:03-3272-6971 FAX:03-3272-6972
<http://www.gfnet.gr.jp> e-mail: info@gfnet.gr.jp

参考資料

緑内障フレンド・ネットワーク「患者会員アンケート調査」概要

調査目的: 緑内障の実態を把握し、今後の啓発活動に役立てる。

調査設計: 調査対象 緑内障フレンド・ネットワークの患者会員 有効回答:969 名

調査方法 郵送調査

調査地区 全国

調査期間 2008年5月2日～6月6日

内訳:

	男性	女性	計
40歳未満	52 (17.9%)	60 (8.8%)	112 (11.6%)
40代	59 (20.3%)	201 (29.6%)	260 (26.8%)
50代	80 (27.6%)	251 (37.0%)	331 (34.2%)
60代	23 (7.9%)	23 (3.4%)	46 (4.7%)
70歳以上	76 (26.2%)	144 (21.2%)	220 (22.7%)
計	290	679	969

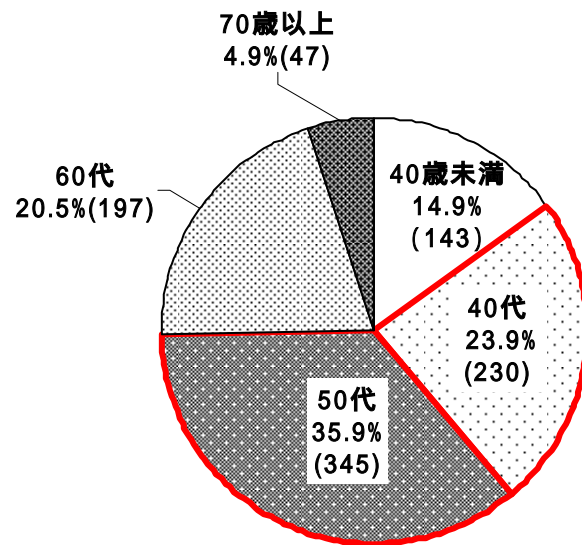
平均年齢: 60.6歳 (男性:59.3歳、女性:61.1歳)

調査結果の詳細

1. 緑内障発見年齢

緑内障の発見年齢は50代が最も多く35.9% (345/962人)、次いで40代が23.9% (230/962人)、60代が20.5% (197/962人)となり、40-50代で全体の59.8% (575/962人)を占めました。

質問 . 緑内障と診断されたのは、何歳のときですか。 (n=962, SA)



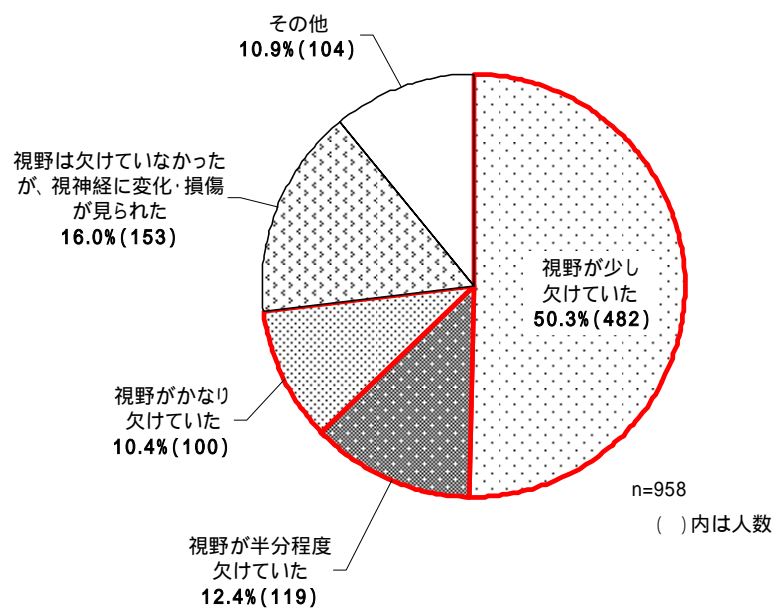
n=962

()内は人数

2.緑内障診断時の状況

緑内障と診断された時の進行状況は、「視野が少し欠けていた」50.3% (482/958 人)、「視野が半分程度欠けていた」12.4% (119/958 人)、「視野がかなり欠けていた」10.4% (100/958 人)で、合計で 73.2% (701/958 人)に視野欠損が見られました。

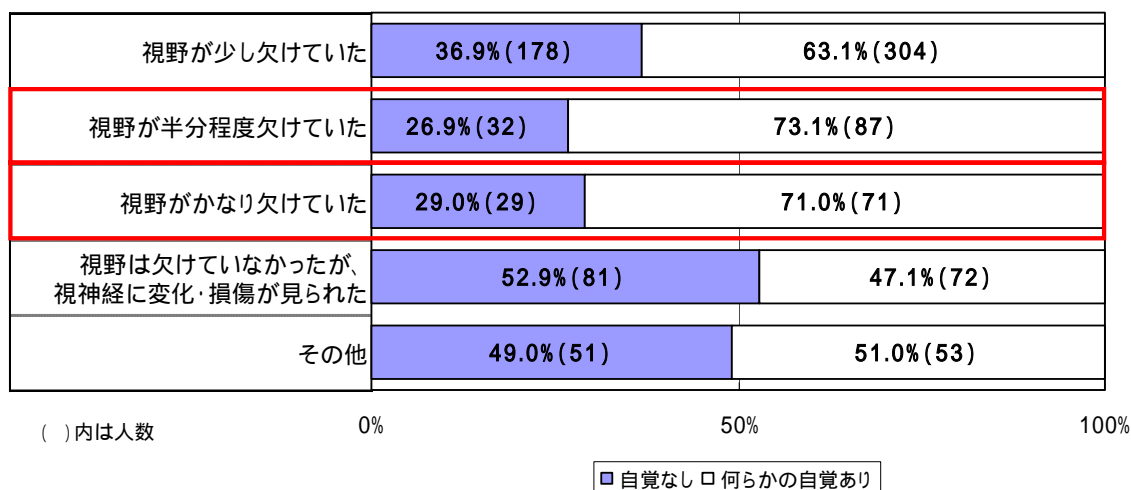
質問 . 緑内障と診断された時点での病状についてお教えてください。(n=958、SA)



3.自覚症状と緑内障診断時の状況の関連性

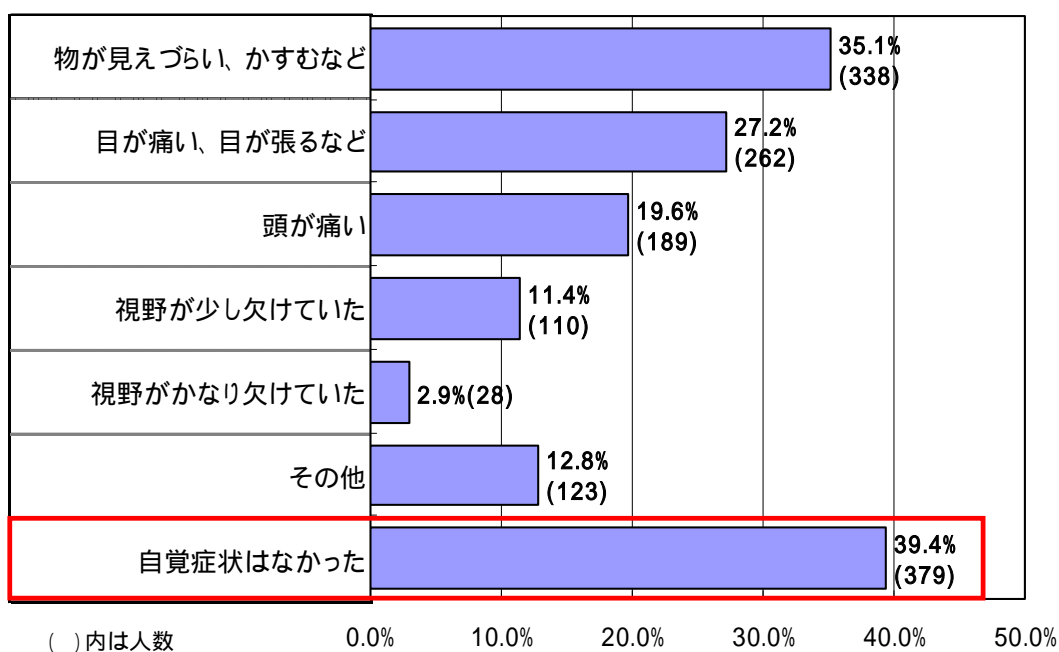
緑内障と診断された時点で、視野が半分程度欠けていたのに「自覚症状はなかった」が 26.9% (32/119 人)、視野がかなり欠けていたのに「自覚症状はなかった」が 29.0% (29/100 人)で、合計 27.9% (61/219 人)に上りました。このことから、自覚症状が現れにくいのは初期の段階に限らないことがわかりました。

【緑内障と診断時の状況 P.5】 × 【緑内障と診断される前の自覚症状の有無 P.6 下図】



また、緑内障と診断される前に「何らかの自覚あり」とした内訳は以下のとおりです。具体的な項目では「物が見えづらい、かすむなど」を挙げた人が最も多く、35.1% (338/963 人)でした。しかし、「自覚症状はなかった」がそれを上回り、39.4% (379/963 人)となっています。

質問：緑内障と診断される前に、次のような自覚症状はありましたか。(n=963、MA)

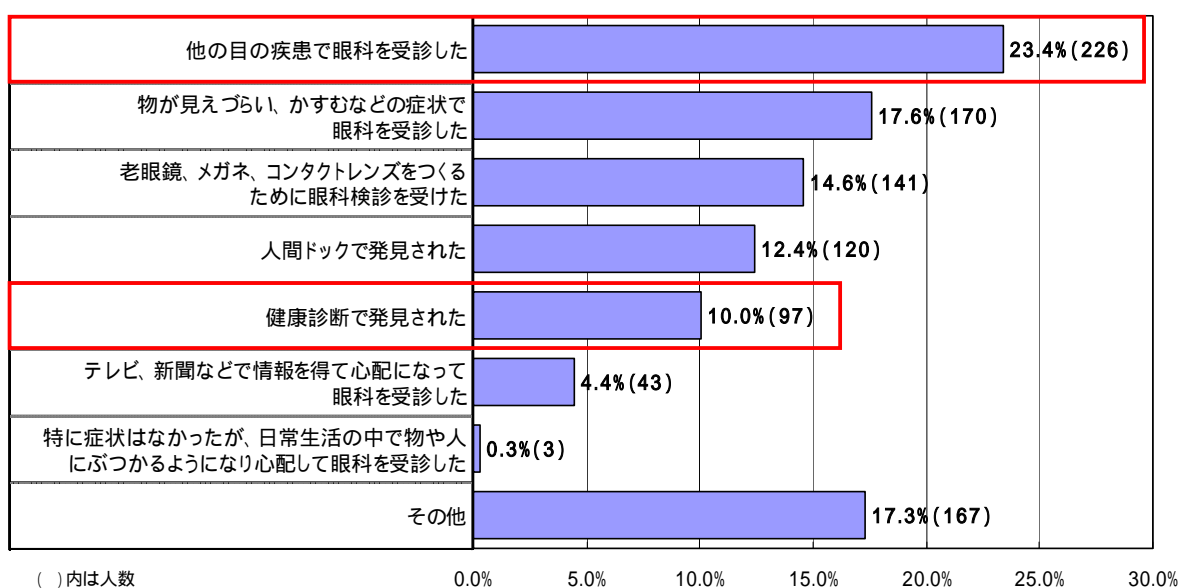


4.緑内障が発見されたきっかけ

緑内障が発見されたきっかけとして、「他の目の疾患で眼科を受診した」と回答した人が 23.4% (226/967 人)で最も多く、次いで「物が見えづらい、かすむなどの症状で眼科を受診した」17.6% (170/967 人)、「老眼鏡、メガネ、コンタクトレンズをつくるために眼科検診を受けた」14.6% (141/967 人)となっています。回答者の半数以上は、何らかの理由で眼科を受診した際に緑内障が発見されたことがわかりました。

一方、「健康診断で発見された」人は 10.0% (97/967 人)にすぎませんでした。現行の健康診断では、緑内障の発見につながる検査項目が必須では含まれていない場合が多いためだと思われれます。

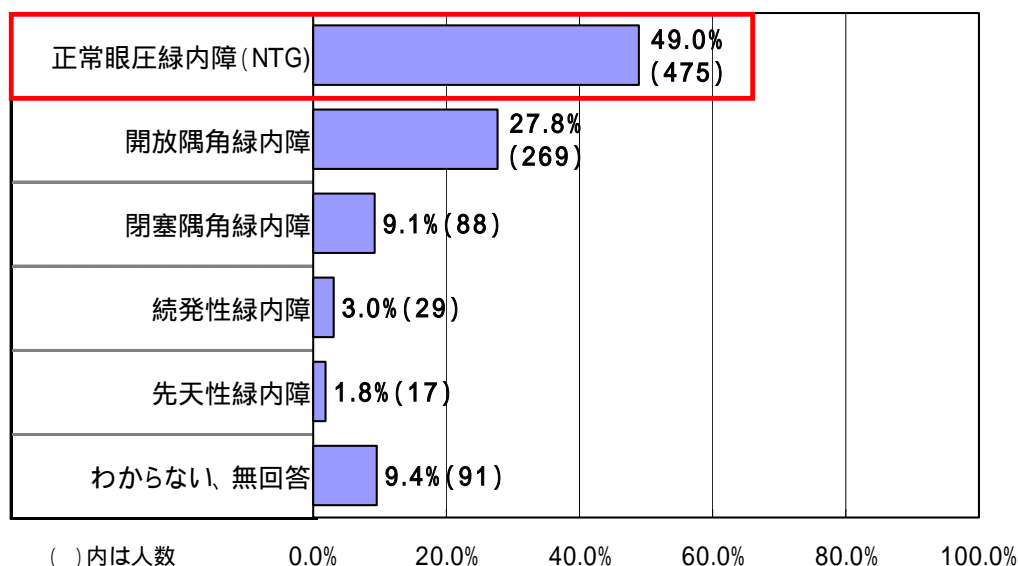
質問. あなたが緑内障を発見されたきっかけは何ですか。(n=967、SA)



5.緑内障のタイプ

緑内障のタイプは「NTG(正常眼圧緑内障)」が最も多く、49.0%(475/969人)と約半数を占めました。NTGは特に日本人に多いと言われ、眼圧が正常の範囲内にもかかわらず視野が欠けていくタイプのため、眼圧検査だけでは発見できない緑内障です。

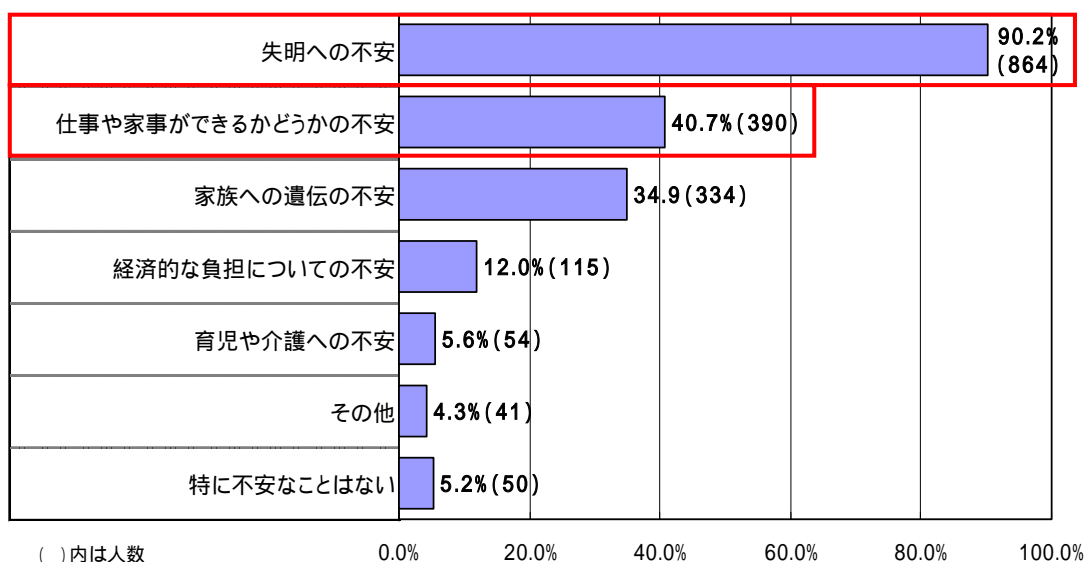
質問. あなたの緑内障はどのタイプですか。(n=969, SA)



6.緑内障診断時の不安

緑内障と診断された時に不安に思ったこととして、「失明への不安」を挙げた患者が 90.2%(864/958人)に上りました。次いで、「家事や仕事ができるかどうかの不安」が 40.7%(390/958人)を占めました。

質問. 緑内障と診断された時、不安に思ったことは何ですか。(n=958, MA)

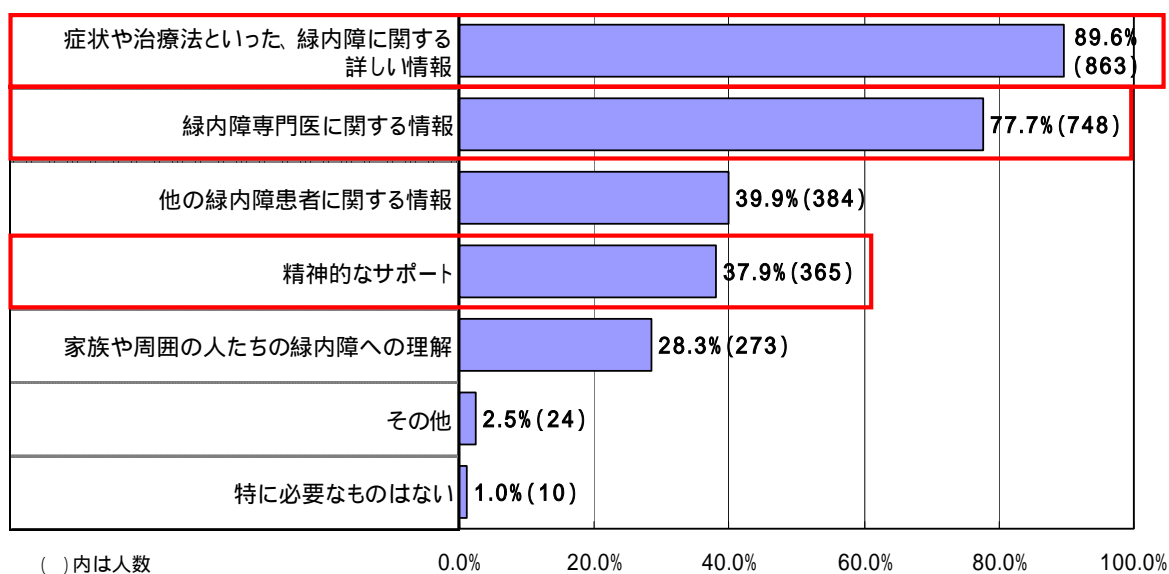


7.緑内障との診断後の生活に必要なもの

緑内障と診断された後の生活において必要なものとして、「症状や治療法といった、緑内障に関する詳しい情報」が最も多く 89.6% (863/963 人)、次いで「緑内障専門医に関する情報」77.7% (748/963 人)となりました。また、「精神的なサポート」という回答も 37.9%寄せられました。

質問. 緑内障と診断された後の生活の中で、必要だと感じているものを挙げてください。

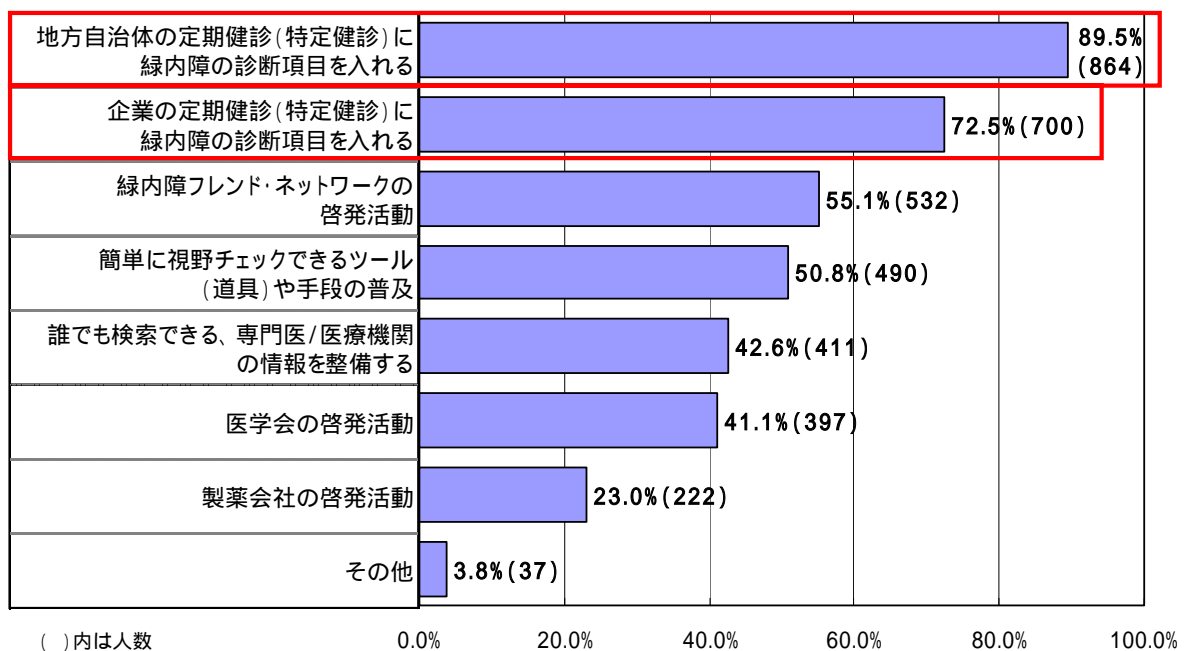
(n=963, MA)



8. 緑内障の早期発見のために必要な取り組み

緑内障の早期発見のために必要な取り組みとして「地方自治体の定期健診に緑内障の診断項目を入れる」と回答した人は 89.5% (864/965 人)、「企業の定期健診に緑内障の診断項目を入れる」と回答した人は 72.5% (700/965 人) に上り、ほとんどの患者が年に一度行われる健康診断の検査項目に緑内障の発見につながる検査を導入する必要性を訴えています。

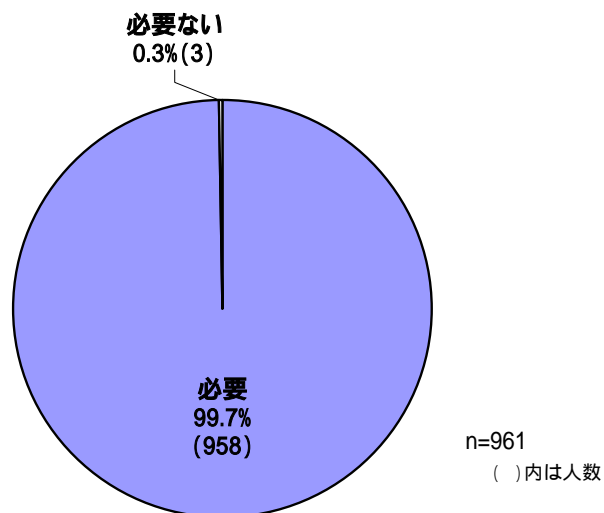
質問 . 緑内障の早期発見のために、必要な取組みは何だと思えますか。(n=965、MA)



9. 目の定期健診

回答者のほぼ全員 99.7% (958/961 人)が「緑内障ではない人でも、目の定期健診は必要」と回答しています。

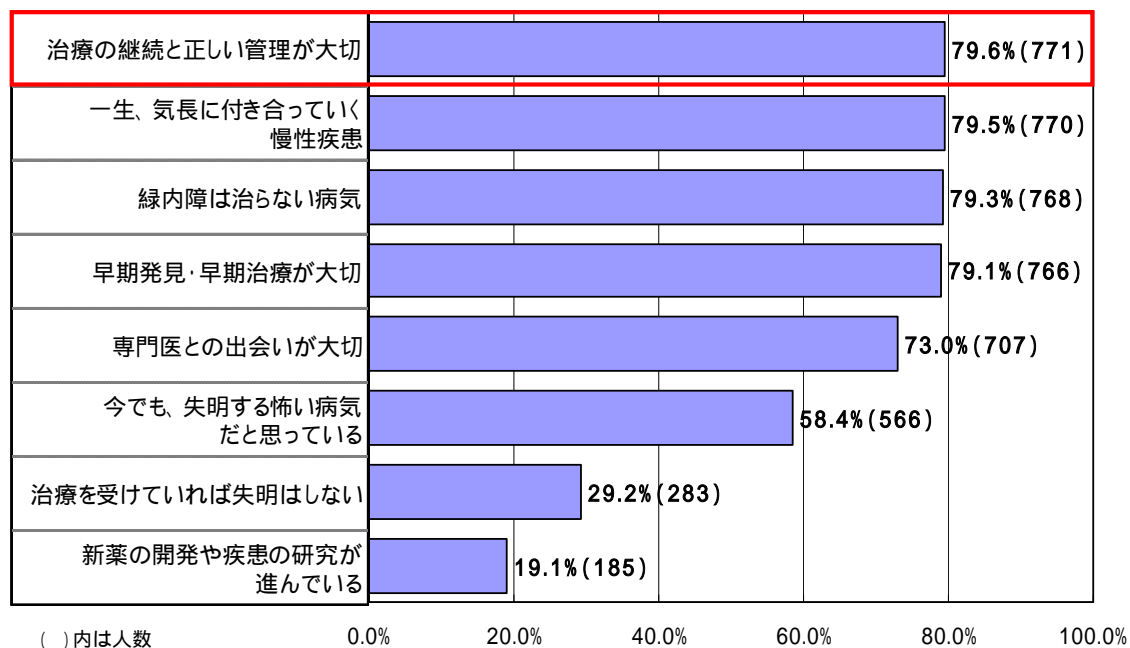
質問 . 緑内障ではない人でも、目の定期健診は必要だと思いますか？(n=961、SA)



10 緑内障に対するイメージ

緑内障に対して抱くイメージは「治療の継続と正しい管理が大切」が79.6% (771/969人)で最も多くを占めました。僅差で「一生、気長に付き合っていく慢性疾患」、「早期発見・早期治療が大切」などが並び、緑内障と向き合っている患者の姿が伺える結果となりました。

質問：緑内障について、あなたのイメージを教えてください。(n=969、MA)



以上